

駒場友の会

会報第18号

人間の安全保障と東日本大震災 シンポジウムとコンサート

十月八日(土)、駒場キャンパス九〇〇教室で、「人間の安全保障と東日本大震災」と題したシンポジウムとコンサートが開催されました。このイベントは、駒場の「人間の安全保障」プログラムとフォーラムが共催したものです(駒場友の会は後援)。

シンポジウムでは、日本弁護士連合会の宇都宮健児会長と辻元清美代議士、高須幸雄本学特任教授(国連事務総長特別顧問、前国連大使)、佐藤安信本学教授が今回の被災者支援や復興のための協力のあり方を議論しました。被災者一人ひとりの命、財産、尊厳



を守るという観点からされた討議は大変に熱がこもり、被災者支援に女性の視点が欠けているなど人間の安全保障ならぬ指摘が多

くありました。

フロアーからも、現地で緊急支援／長期支援を行っているNPO「RQ被災地女性支援センター」スタッフ(本学卒業生)が、避難所で化粧品メーカーの協力を得て行った女性への「フェイスマッサージ」サービスは大好評で、最初は遠慮していた女性たちがみるみる元気になるまで、自分のことを話し始めたという話を披露されたり、駒場と社会のつながりがさまざまな形で見えるものになるイベントでした。

第二部のピアノコンサートでは、平原誠之さんが自作の《レクイエム》《いのちの尊さ》などを情熱的な演奏で披露され、好評でした。

駒場友の会の会員会友も多数参加され、主催者からは友の会が行った寄付についてのお礼とあわせて、感謝の言葉を頂戴しました。

味覚のアトリエ@駒場

二〇年以上にわたって、フランスで毎年十月の第三週に実施されている味覚教育イベント「味覚の一週間」が今年から日本でも開催されました。



これにちなんで、駒場友の会では、「味覚のアトリエ@駒場」味覚と食に関するワークショップを開催しました。十



「味覚の一週間」では、全国の小学校40校、東京ガスのショールームなど24か所で多彩にイベントが展開された。駒場ではセミナー室に調理器具を持ち込んで実演と解説が行われた。調理器具の提供は、(株)ティファール。

月二八日(金)、駒場ファカルティハウスセミナー室で開催。

講師は、世田谷区北沢のパティスリー「ル・ポミエ」オーナーシェフパティシエのフレデリック・マドレーヌさんと、駒場キャンパスの「ルヴェンヴェール」のオーナーシェフ伊藤文彰さん。定員は六〇名でしたが、学生と友の会会員会友の申し込みですぐに満席になりました。

フレデリック・マドレーヌさんは、味の基本となる四つの味覚(しょっぱい、すっぱい、にがい、あまい)を代表する食材の特徴と、それらを料理に使う際のポイントを自身の創作経験を交えながら説明されました。四つの味覚が味わえる特製スイーツも配布。参加者は皆、一口一口を噛み締めるようにそれぞれのスイーツを味わいました。伊藤文彰さんは、これらの四味に加えて「うまみ」が楽しめるオリジナルメニュー「トマトフォンデュ入りイワシのタルトオニオンピュレ添えバルサ

ミコ酢と苦味のある野菜のサラダと共に【の作り方を披露され、一同、試食用の料理とともに奥深い食の文化を満喫しました。

駒場の樹木を楽しむ会 時計台特別公開

今回で第十回となった東京大学ホームカミングデイ行事の一環として、駒場友の会では、十月二十九日(土)に恒例の「駒場の樹木を楽しむ会」を開催しました。芝野博文北海道演習林長の講演「ソローの言葉と富良野の森」の後、芝野先生の引率によりさわやかな秋空の下、キャンパス内を散策しながら樹木へのネームプレートの取り付けを行いました。

また、今年から時計台公開をかわせて実施したところ、多くの会員会友の参加をいただきました。春のキャンパスツアーに参加できなかったため今回来られたという学生ご父母の方々、久しぶりにキャンパスを訪ねられた卒業生など、多数の方々に楽しんでいただきました。今年も開催の予定です。



はじめてのおつかい

川中子 義勝

父に本を読んでもらった記憶がない。父は高度成長時代の企業戦士。子どもが目覚める前に出勤し、寝ついた頃によくやく帰宅する。父の顔を見ることもまれだった。そのためか長じて一家を構えても、振るまい方が分からない。「意気地のない」父親であった。だが「育児なし」と妻に揶揄されても、それなりに努力はしていた(のかも)。子どもの記憶に、本を読んでもくれる父の姿はなんとか留まったらしい。成人して、それぞれが興味を尋ね求めるようになって久しいが、「子どもの本」という話題では(かろうじて)会話が成り立つ。たとえば絵本の定番といわれる『三びきのやぎのらがらどん』。上の子は、その繰り返しの響きとともに、スリリングな展開を喜んでた。だが下の子に言わせると、その本は『おしいれのぼうけん』などとともに、ときに怖いものを覗く思いで開き、すぐにボタンと閉じるくらいがよかったのだという。男の子と女の子の違いもある。下の子の幼児期は、『こどものとも』に筒井頼子(文)と林明子(絵)のコンビで『あさえとちいさいいもうと』や『こんとあき』などが刊行されていった時代に重なる。この子は『とんことり』などを手にする頃は、すでに一人で読むことを始めていた。では、読み聞かせてもらって一番思い出に残っているものは? やはり同じコンビの『はじめ

てのおつかい』だという。牛乳を買いにいった幼い少女。小さい声と低い背のため、お店の人になかなか気づいてもらえない。子どもの目の高さから描かれた描写や暖かい色調とともに、はらはらさせつつも安心を導く筋と結末は、読み上げる立場にも心地よかった。同名のテレビ番組が放映される十一年以上も前、はじめて頁を繰ったときの子どもの新鮮な反応が思い起こされる。

そのような会話の内に記憶を辿っていくと、いまひとつの「おつかい」の話が甦ってきた。それは絵本ではない。『エーリヒ・ケストナー博士の抒情的家庭薬局』という詩集に収められた一篇、「絶望第一号」と題する詩。私が手にしたのは、中学初年の頃、小松太郎訳『人生処方詩集』と題された文庫本であった。

往来を走る小さな男の子。掌に握られた一マルク。店員に「パン半分、ベーコン四分の一ポンド」と唱え、掌を開く。だが、お金がない。やがて店は閉じ、街は暮れる。少年は何度も掌を開き裏返してみるけれど……。両親は少年をずっと待っていた。



母親が心配になって探しに行く。そしてひっそりと立ち尽くしている少年を見つける。

「彼女は ハツとして 訊いた どこへ行ってたの? / すると 彼は大声で泣き出した / 彼の悲しさは 彼女の愛よりも 大きかった / そしてふたりは しょんぼりと 家へはいった」

子どものための作品ではない。絵本を読んでもらう年齢の子どものには分からないかもしれない。しかし、その種の悲しみそのものは、子どもが知らない経験ではない。ケストナーが子どものために書いた作品、たとえば『飛ぶ教室』には、休暇で仲間たちがみな帰宅するなか、家の貧しさのためにひとり寄宿舎に残らねばならない少年の心が描かれている。状況や場面は多様だが、質を等しくするような真摯は、人生初期のかなり早い時期から自覚されているのではないか。

「ふたりは しょんぼりと 家へはいった」。人生最初の絶望を味わったこの少年を母親は叱らなかつた(父親はどうしたであろう)。詩の形でも人生を鮮烈に語る事ができる。その意味でこの詩は、文学への覚醒を導いた作品のひとつと言えるかもしれない。『飛ぶ教室』の序章に、ケストナーは、子どもの心が大人の心と同じ重さを持つと述べ、その心を大人になっても失わないでほしいと訴えている。嬰兒にも欲心はあり、打算からまったく無縁であるとはいえない。しかし、喜びを

喜びとし悲しみを悲しみと受けとめる真摯さにおいて、子どもの心はより一途である。それこそ人生を歩んで行く力の源との謂であろう。

(かわなごよしかつ、

超越文化科学専攻教授、ドイツ語

被災地救援支援のために

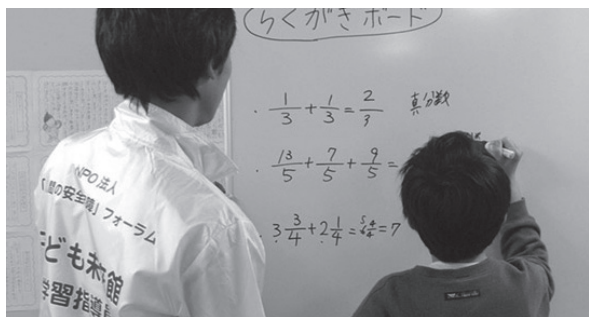
内尾 太一

修士課程から駒場に来てもうすぐ五年、まさか一介の大学院生の私がこの会報で紹介されることになるうとは正直思ってもみませんでした。少なくともここ最近の一年間を除いては、他の駒場の院生の中に埋もれ、自分の身の丈にあった研究を肅々と進めていたのですから。

振り返って考えてみれば、事の発端は二年前の二〇一〇年三月まで遡ります。博士課程への進学も決まり、指導教員の山下晋司先生(文化人類学)に感謝の気持ちを伝えるために研究室を訪ねました。そして、それは一頻り今後の研究についての相談をした後のことでした。あのときの山下先生の一言は今でも鮮明に覚えています。

「実はね、これからNPOをつくらうと思うんです」

最初は、自分が事務局長として誘われていたことに気付きませんでした。そして、一応その話を引き受け、それから一年は自身の研究の合間に、組織の設立のための準備を進めていきました。NPO法人の定款や設立趣意書、



事業計画、予算案の作成などです。年度が明けて二〇一一年になる頃には、新年度から前国連大使の高須幸雄先生を理事長とする「人間の安全保障」フォーラム(H S F : Human Security Forum)を立ち上げることが決まりました。

しかし、そこまでは順調に思われたH S Fの船出も、二〇一一年三月十一日をもって一変します。その航路は、あの東日本大震災が引き起こした大きなうねりによって、予想もしていなかった方向へと向かっていきました。

日本社会が混乱に陥っている直中の四月二日、何とか設立総会を終えましたが、今回の震災がもたらした甚大な被害は、任意団体として産声を上げたばかりのH S Fが立ち向かうには余りに深刻な人間の安全保障(人々の安全・

安心・尊厳)の危機でした。実際に支援といっても、出来立てほやほやの組織にそんな大きなことができるはずもありません。H S Fの緊急支

援参人はまだ時宜を得ていないという意見もありました。結果的には小さくともできることから始めよう、巧遅よりも拙速を選ぼうということになり、最初に実施したのはここ駒場から宮城県の被災地への「ウィークエンド・ボランティア派遣」でした。

着手にあたってまず仙台市内にアパートを借り、そこをH S Fの支援の拠点としました。当時はボランティア活動に対してまだ「自己完結」が強く叫ばれていたのですが、H S Fでは平日は授業や仕事で忙しい学生や社会人を主な対象に「週末のみ、身体ひとつで参加できる」を謳い文句としていました。移動手段は車で、私が運転手兼ボランティアコーディネーターとなりました。

金曜日の夕方に駒場を出発してから、片道約三五〇km、六時間くらいで仙台に到着します。土曜日一日と日曜日の午前中、瓦礫撤去や泥かきのボランティアをし、日曜日の夜に帰ってくるという極々シンプルな支援です。

しかし毎週のように東京と宮城を無休無給で往復していたので、正直、私には体力的にも精神的にも相当参っていました。駒場友の会から五〇万円のご寄付を頂いたのはそんな状況の真っ只中のことでした。それはH S Fにとつてまさに千天の慈雨でした。そのお金は拠点維持費やガソリン代に使わせて頂き、有り体に言えば、私の人件費にはならなかったのですが、こうして応援して頂いているという事実が何よりの励みとなりました。その支えあって、

第一六陣(二〇一一年十一月)までの派遣を行うことができました。

丁度その頃から支援活動の主流は、季節の変化とともに屋外での瓦礫撤去や泥かきから、仮設住宅等で生活する被災者の支援へとシフトしていきました。H S Fも現在は、宮城県登米市に新たな拠点を築き、南三陸町や気仙沼市出身の被災者が暮らす仮設住宅地三か所で子どもの教育支援「子ども未来館」プロジェクトを進めています。この命名者は駒場友の会事務局長の山本泰先生で、仮設住宅の集会所を使って子どもの学童保育や学習支援、奨学金情報の提供などを行っています。私自身、昨年十二月から被災地に移り住み、支援の陣頭指揮をとっています。

この支援に際しても、駒場友の会の呼びかけで一〇〇名以上の会員会友の皆様から、凡そ六〇万円ものご寄付と、五〇〇冊もの寄贈図書が寄せられました。またしても頂いたご厚意は決して徒や疎かには致しません。H S F関係者一同、被災地の子どものために全力を尽くすことをご恩にお応えできればと思っています。

最後になりましたが、こんな私にもH S Fの支援活動を通じて目指しているところがあります。それは、被災地の「人間の安全保障」をめぐる現場と言葉をつなぐことです。そのために被災地支援と平行してフィールド調査も行い、この震災復興支援をテーマに博士論文を書くようとしています。浅学非才の身ではありますが、今は小さな将来

の東北復興の主役達と一緒に過ごしていると、不思議と持てる以上の力が湧いてくるような気がするものです。

(うちおたいち、NPO法人

「人間の安全保障」フォーラム事務局長)

「Reine pur」と

駒場キャンパス

平野 玲音

本拠ウィーンから一時帰国した昨年五月、駒場友の会コンサートに出演するため、懐かしの駒場キャンパスを訪れました。在学中に、やはりチェリストの両親と一緒に駒場のオルガン演奏会に出演して以来でしたので、母校の皆様は温かく迎えていただきほっとした気持ちになりました。

ちょうど数日後に「Reine pur」と題したシリーズ公演を始めることになっていたため、駒場でもその第一回「モーツァルトの影法師」と同じプログラムを演奏しました。チェロ・リサイタルには珍しいモーツァルトを陰の主役としてダンツイの《ドン・ジョヴァンニ》の主題による変奏曲《ハイドンやファンメルなど、彼と交友を持った作曲家たちの作品を取り上げました》。

Reine purの「pur」はドイツ語で「純粋な」「混じり気のない」などの意味で、日常的にはApletsati pur(炭酸なしのリングジュース)のように使います。(「Reine」にも同じような意味があります)。曲目から共演者まですべて自分で選び、だんだんと形を取り始めて

「私」の音楽」を熟成させていくことができれば…という願いを込めました。お陰様で第一回公演はご好評をいただきことができ、秋から冬の帰国中には、永福町のソノリウムにて第二回「新しい道」を開催しました。「新しい道」は、シューマンが若きブラームスを世に送り出した、熱烈な紹介記事のタイトルです。記事の中に「向上めざましい芸術家たち」として名を連ねていたデイトリヒやバルギール(クララ・シューマンの異父弟)の知られざる名曲もプログラムに加えました。

私は文科三類と大学院修士課程(表象文化論コース)の計四年間を駒場キャンパスで過ごし、シューマンの後期作品について修士論文を書きましたので、このコンサートも駒場とゆかりの深いものになりました。

アンコールには、シューマンの《ヴァイオリン・ソナタ第三番》のインテルメッツォをチェロで演奏したのですが、シューマンの死後埋もれていたこの作品を一九五三年に再発見したのは、何と私がウィーンで親しくさせていただいている名ヴァイオリニスト、エドゥアルト・メルクス教授なのだそうです！



だテンポが偶然、教授と全く同じだったと分かり、とても嬉しくなりました。駒場の在学期間中もチェリストとして活動していた私にとって、キャンパスに流れる自由な空気は大変ありがたいものでした。日本では演奏の「技術」がクローズアップされすぎて、音大卒でないことに驚かれています。音大卒のようですが、ウィーンで暮らしていると、学問的な視点をもって「文化の違い」を乗り越える必要性をひしひしと感じます。

ながら族の私(?)を厭わず受け入れてくれる駒場があったからこそ、音楽の都ウィーンを真の意味で味わい尽くし、今なお演奏家として発展し続けられるのかもしれない。冊子『百味』に「ウィーン便り」を連載することで、本場の音楽の在り方に強い関心を持って下さるお客様も増えてきました。「ウィーン便り」は、ファンクラブ公式サイト <http://reine-h.com/> でも読むことができます。

「Reine pur」第三回「チェコの緑」は、sonorium 共催シリーズ二〇一二「映像と音楽」の一環で、六月八日(金)と九日(土)の二回、公演を予定しています。緑色を基調にデザインしたチェコの写真やバックに、モシエレスの《チェロ・ソナタ》、ポツパーの《森の中で》など珍しい作品をご紹介します。ジャンルを超えた新たな表現は、お世話になった表象文化論コースの精神にもつながるでしょうか。ご都合のよろしい日がございますたら駒場育ちの公演を是非聴きにいらしてください。(ひらのれいね総合文化研究科修士課程 〇一年修了、チェリスト)

ながら族の私(?)を厭わず受け入れてくれる駒場があったからこそ、音楽の都ウィーンを真の意味で味わい尽くし、今なお演奏家として発展し続けられるのかもしれない。冊子『百味』に「ウィーン便り」を連載することで、本場の音楽の在り方に強い関心を持って下さるお客様も増えてきました。「ウィーン便り」は、ファンクラブ公式サイト <http://reine-h.com/> でも読むことができます。

ながら族の私(?)を厭わず受け入れてくれる駒場があったからこそ、音楽の都ウィーンを真の意味で味わい尽くし、今なお演奏家として発展し続けられるのかもしれない。冊子『百味』に「ウィーン便り」を連載することで、本場の音楽の在り方に強い関心を持って下さるお客様も増えてきました。「ウィーン便り」は、ファンクラブ公式サイト <http://reine-h.com/> でも読むことができます。

駒場友の会会報 第18号
2012年3月15日発行
駒場友の会
〒153-8902
目黒区駒場3-8-1 東京大学
駒場ファカルティハウス内
電話 03-3467-3536
FAX 03-3465-3334
郵便振替口座
00170-3-481649
メール
info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp
ホームページ
<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/>
デザイン・印刷 株式会社双文社印刷
<http://www.sobun-printing.co.jp>

穏やかな日差しの中でゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理
ルヴェ ソン ヴェール 駒場

駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なさった
コーヒー・紅茶は、お支払いの際に会員証・会友証を
ご提示下さいますと無料になります。

営業時間 11:00 ~ 14:30, 17:00 ~ 21:00
Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902
駒場ファカルティハウス内

駒場友の会第九回総会のお知らせ
五月二十六日(土)十六時四十分より
会場・駒場コミュニケーションプラザ
北館二階多目的教室
学生選抜コンサートも同日に開催
します。どうぞ皆様ご参加ください。
詳細は追ってご案内いたします。